

ソニー創業者の井深大は、戦後日本が科学技術で復興するためには、理科教育こそ重要だと考えていました。井深は日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを発売し、会社経営がようやく軌道に乗り始めた1959年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。

当時の贈呈式当日に、井深大から受賞校の先生方へ贈ったメッセージをご紹介します。

※内容および名称・肩書等は当時のものです。

第8回（1963年） ソニー小学校理科教育振興資金贈呈式

「理想的な雰囲気づくりへ」 井深大 ソニー株式会社社長（当時）

理想的思考の必要な時代

昭和38年度ソニー理科振興資金の贈呈式をただいまから行いますことを、非常に嬉しく、光栄に思います。

日本の小・中学校にとって、理科教育が非常に大切であるということは、いまさら申し上げるまでもありませんが、わが国がこれから世界の経済の中に生きていくには、なんといたっても科学技術が重要で理科教育が基礎になると思います。いろ

いろな業種がありますが、あらゆる業種で基礎的な役割をするのが理科学的な考えであります。その理科学的な考え方を小・中学校のときに頭に植えつけておくことがいかに大切であるかということは、とくにご承知のとおりです。しかし、まだわれわれの頭の中には、“自分は文科系である”とか、“自分は理科系である”というように線を引いて、文科系だから理科のことはさっぱりわからないというようなことがあります。しかし技術革新がこのように進んできた今日、これからやらなければならない仕事の1つ1つを考えてみますと、必ず理科学的な頭がなければならない。理科とか文科とかのけじめがつけられなくなっていきます。

私たちがこの理科振興資金の企てをはじめてから、すでに5年経っていますが、最初はどんなになるだろうという危惧の念を持っていました。しかしこれを助けていただいた審査の先生方のご協力もあって、年々歳々この企てが盛んになり、応募してくださる皆さまのレベルもどんどん上がってまいりました。企画した私どもにとって非常に大きな喜びでございます。

学校へのご恩返しとして

この理科教育振興資金の企てをやりましたのには、いろいろな理由があります。ソニーが生まれて、



「明日の理科教育のために 第8集（昭和38年11月発行）」より

今年は満17年になりますが、初期に、日本ではじめてのテープレコーダーとテープを作りました。しかし、なかなか思わしい売り先がない。ちょうどそのころ視聴覚教育ということがいわれ、全国に広がっていることに注目し、テープレコーダーを視聴覚教育網にのせ、それで今日のソニーの基盤が出来上がったのであります。その第1番のお客さまが小学校でした。私どもは何とかしてこのご恩返しをしなければならぬと考えました

それから第2に、私は小学校を転々と変わりました。最初が日本女子大の附属小学校、次が愛知県の安城小学校、それから北海道の苫小牧の小学校、また愛知県に戻り、次が神戸の小学校という具合でした。その間、私はまだ小さかったので、理科を勉強する段階になったのは、最後の愛知県安城小学校と神戸の小学校でしたが、理科室のまわりをいろいろとうろついたことは憶えています。その時、理科教室で受けた印象が今日でも頭に残っています。設備のあり方、機械のいかめしさといったことが、ときどき浮かび出てくるものです。それにつけても日本の小学校の格差はピンからキリまでであるような気がして、こういう企てが、熱心さは十分にあるが資金の無いためにできないという学校に少しでもお役にたつたらということから、理科教育振興資金を始めるようになったのであります。

以来、非常に僭越ないい方ですが、この企てがひとつの刺激となり、小学校の理科教育が非常に深まってきたことは確かだと思えます。途中から中学校も加わりましたが、これはいま一步という事かと思えます。このように日本中の学校で、理科学的な考え方、理科学的な雰囲気、小さいときから頭に沁み込んでいけば、次の時代の日本の科学も相当に変わってくるのではないかと、こうした基礎に立てば日本はさらに大きく伸びていき、実力のある国に成長していくのではないかとと思えます。

日本中に受賞校の熱意を

私は東南アジアを2週間ばかり回りましたが、科学的・技術的なものを背負ってアジア地区のリーダーとなってやらなければならぬのは、どうしても日本だと痛感しました。皆さまが努力され、理科教育に力を尽くされた成果が、今日私どもから資金を差し上げる状態になったと思えます。私どもから差し上げるものはわずかなものですが、これからの勉強の足しになれば、これに過ぎる喜びはありません。

最後に、当初から審査をしていただきました茅、篠原、内藤 三先生^(※)は、名目的な審査でなく非常に熱意で審査にあたってくださったということを皆さまにお伝えするとともに、そのご努力に心から感謝いたします。

※三先生： 当時の審査委員である茅誠司氏（東京大学学長）、篠原登氏（科学技術庁次官）、内藤誉三郎氏（文部省初等中等教育局長）のこと